

The Ascent to Truth

by John Louis

ΚΑΒΥΛΩΝΟC CΣΗ
ΜΕΡΑC CΙCΗ ΜΕΤΑ
ΕΩCΗ ΜΕΡΑCΗC
ΑΠΙCΟΛΑΝΕΝ

ΜΟΝΙΜΗC CΟC C
ΠΙCΤΑΙΟC ΜΜΕΝΙ
ΛΑΩΝC C C ΝΗΟΙC C
ΧΗΡΑΙC ΠΑΙΟC Μ
ΜΕΝΗC ΝC ΟΝC C
ΑΡΧΟC C C ΝΧΩC C
C C ΝΗΟΙC C C C
ΡΟΝ

Ω ΗΟ
ΚΑΙΟC C C ΚΑΑΥ
C C C C C C C C

Α
C C C C C C C C C
ΑΑΙΑΑΙΟΙΑΙ C C
C C C C C C C C



第4章:

Discipleship in Our Pilgrimage

巡礼における弟子の基準



詩編120-134

都上りの歌

Songs of Ascents

申命記6:5

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を
尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

レビ記19:18

復讐してはならない。民の人々に恨みを
抱いてはならない。自分自身を愛するよ
うに隣人を愛しなさい。わたしは主であ
る。

弟子と巡礼者

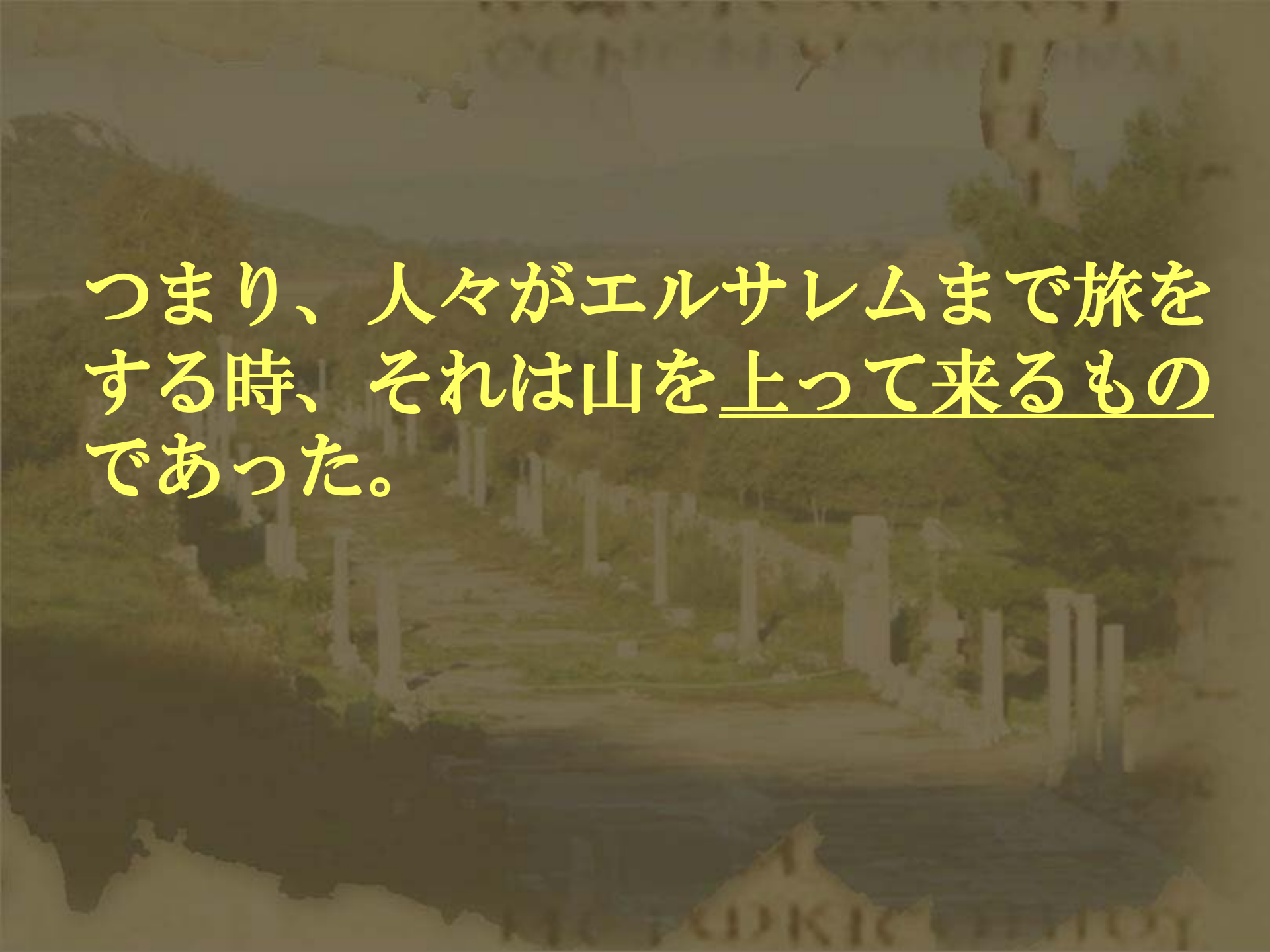
Disciple Pilgrim

- ・ 弟子とは、その主人の見習いとなって人生を費やす人々；私たちににとって、その主人とはイエス・キリストとなる。弟子は、学術的な意味合いではなく、職人の現場で学ぶ者のことである。
- ・ 巡礼者とは、どこか他の場所に行くのに時間を使う人々である。

辞書は「上がること、上昇、昇進、向上」
(*ascent*) を「上の方へ旅する行為」(*Collins
Cobuild Dictionary, 1993*)として定義している。

これらの詩編はユダヤ人の祭りを祝うために、
エルサレムまでの道を上って来た、巡礼者た
ちによって歌われたものだった。

エルサレムは標高の高い場所に位置していて、
海拔約650-800m、その地域では最も標高の
高い都市のひとつだった。



つまり、人々がエルサレムまで旅をする時、それは山を上って来るものであった。

ディアスポラ Di·as·po·ra (n.)

- 紀元前6世紀のバビロン捕囚から現在に至る、ユダヤ人のイスラエルの外への離散
- パレスチナあるいは現代のイスラエル以外での、ユダヤ共同体もしくはユダヤ社会

参照



Routes of the Pilgrims

使徒2:9-11

わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

他の例:

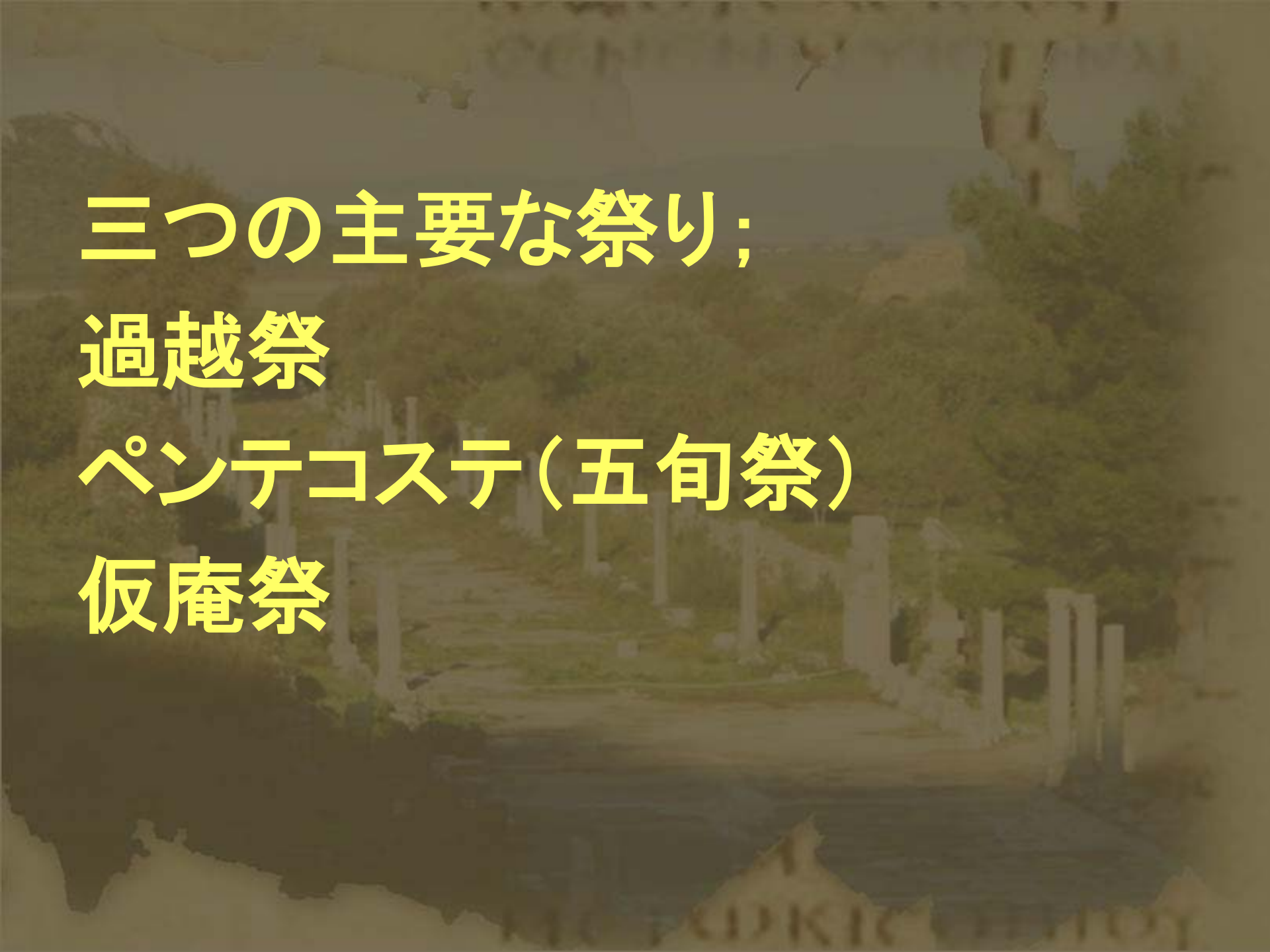
- エチオピアの宦官 (使徒8: 26-40)
- キレネ人のシモン (マルコ 15: 21)

参照



出エジプト23:14-17

あなたは年に三度、わたしのために祭りを行わねばならない。あなたは除酵祭を守らねばならない。七日の間、わたしが命じたように、あなたはアビブの月の定められた時に酵母を入れないパンを食べねばならない。あなたはその時エジプトを出たからである。何も持たずにわたしの前を出てはならない。あなたは、畑に蒔いて得た産物の初物を刈り入れる刈り入れの祭りを行い、年の終わりには、畑の産物を取り入れる時に、取り入れの祭りを行わねばならない。年に三度、男子はすべて、主なる神の御前に出ねばならない。



三つの主要な祭り；
過越祭
ペンテコステ（五旬祭）
仮庵祭

イザヤ30:29


あなたたちは祭りを祝う夜のように歌い
／笛に合わせて進む者のように心楽し
み／主の山に来て／イスラエルの岩な
る神にまみえる。

- 両方の旅路は、霊的な故郷を捜し求める巡礼である。—ユダヤ人にとってそれは神殿であった。クリスチャンにとっては地上ではない。
- 両方の旅路は、神を人生の中心として必要としている人々と関係がある。
- 両方の旅路は、今の立場から「上る」ものとして、その目的地を見ている。
- 両方の旅路は、時間、献身 (commitment)、犠牲および弟子として生きることを含んでいる。

- 両方の旅路は、その無事のために神に信頼することを含んでいる。

- 両方の旅路は、その目的地としてエルサレムがある。—ユダヤ人にとってその目的地は都市としてのエルサレムであり、クリスチャンにとっては天の新しいエルサレムである。

- 両方の旅路は、巡礼者たちをケアする神によって導かれるものである。



詩編120—

世の虚偽の認識

世の嘘を信じているか。
神の忠実さを見ているか。

広告、仕事、新聞、テレビ、映画。 . . .

弟子として生きることは、世の虚偽
を知り、それに拒絶され、その代わ
り、より忠実な神を追い求めていく
ことを意味する。




詩編 121 -

神は悪からわたしたちを守られる

巡礼者は、彼らの目に見えない神の見守りをその慰めとして、巡礼に忠実だった。

弟子として生きることは、神があなたをケアしてくださること、そしてわたしたちが神を喜ばせることだけに集中すべきであることを信じることを意味する。



詩編122—
神の家に行くこと

弟子として生きることは、神の民の中から神のメッセージを聞くことに興奮し、弟子としての人生に熱心にそれを適用しようとすることを意味する。


弟子として生きることは、ただ自分のことだけでなく、神の国のことを気に掛けることを意味する。

詩編 123 -

多くの嘲笑を耐え忍ぶこと

彼らは多くのことを耐え忍んだが、巡礼者たちは巡礼に忠実であった。

弟子として生きることは、人生の困難を通り過ぎるとき、特に無分別な人々と関わる時、わたしたちが神を仰ぎ見る必要があることを意味する。

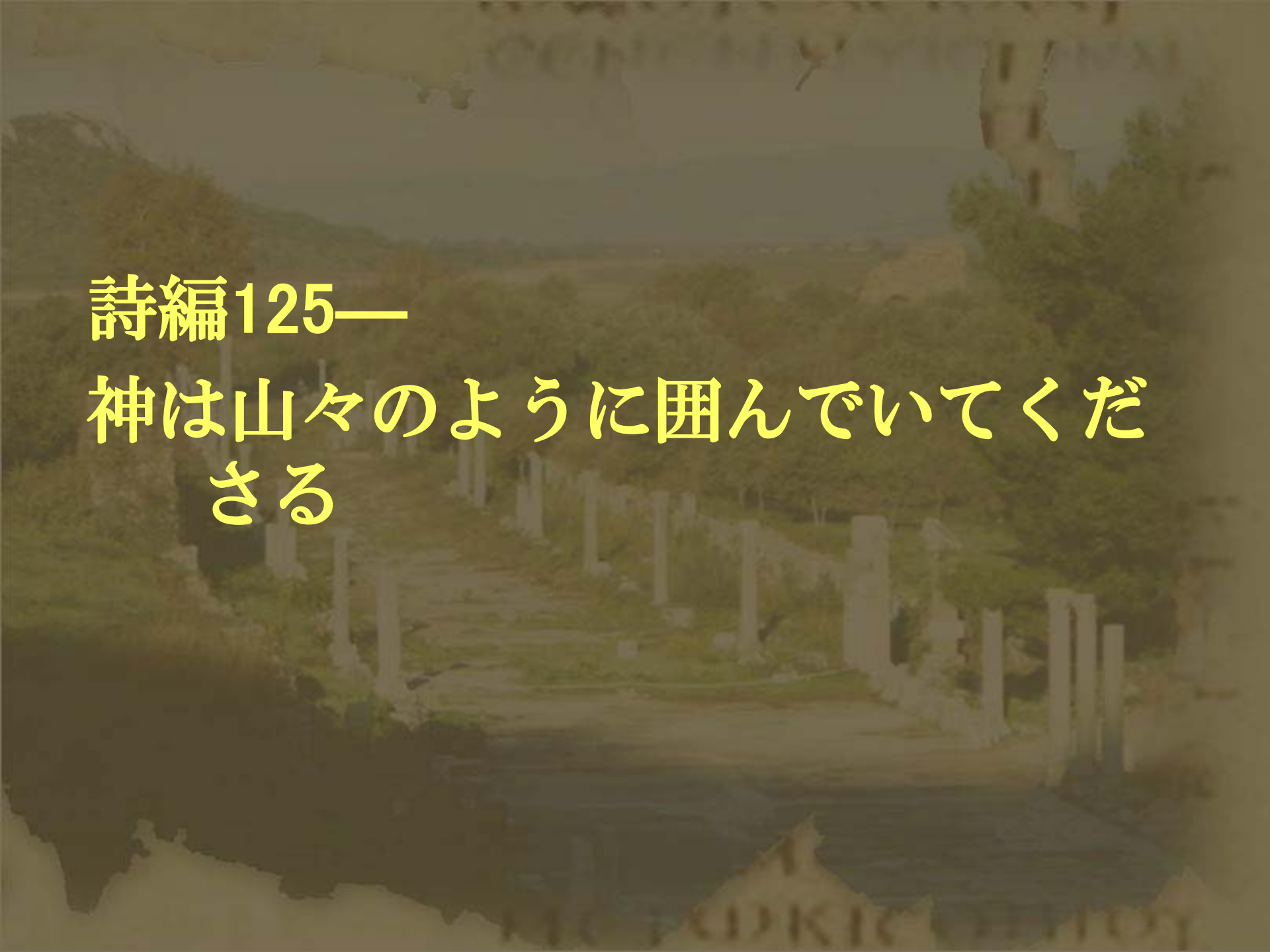


詩編124—
神は助け手

彼らはその歴史に目を通して、ひとつの結論に達した。神は自分たちと共にあった、ということである。

その全体像を見ることによって、巡礼者たちは巡礼に忠実になることができた。

弟子として生きることとは、ただわたしたちの「一時の軽い」問題ではなく、その全体像を見ることであり、神がとりなし、助けてくださることを信じることを意味する。



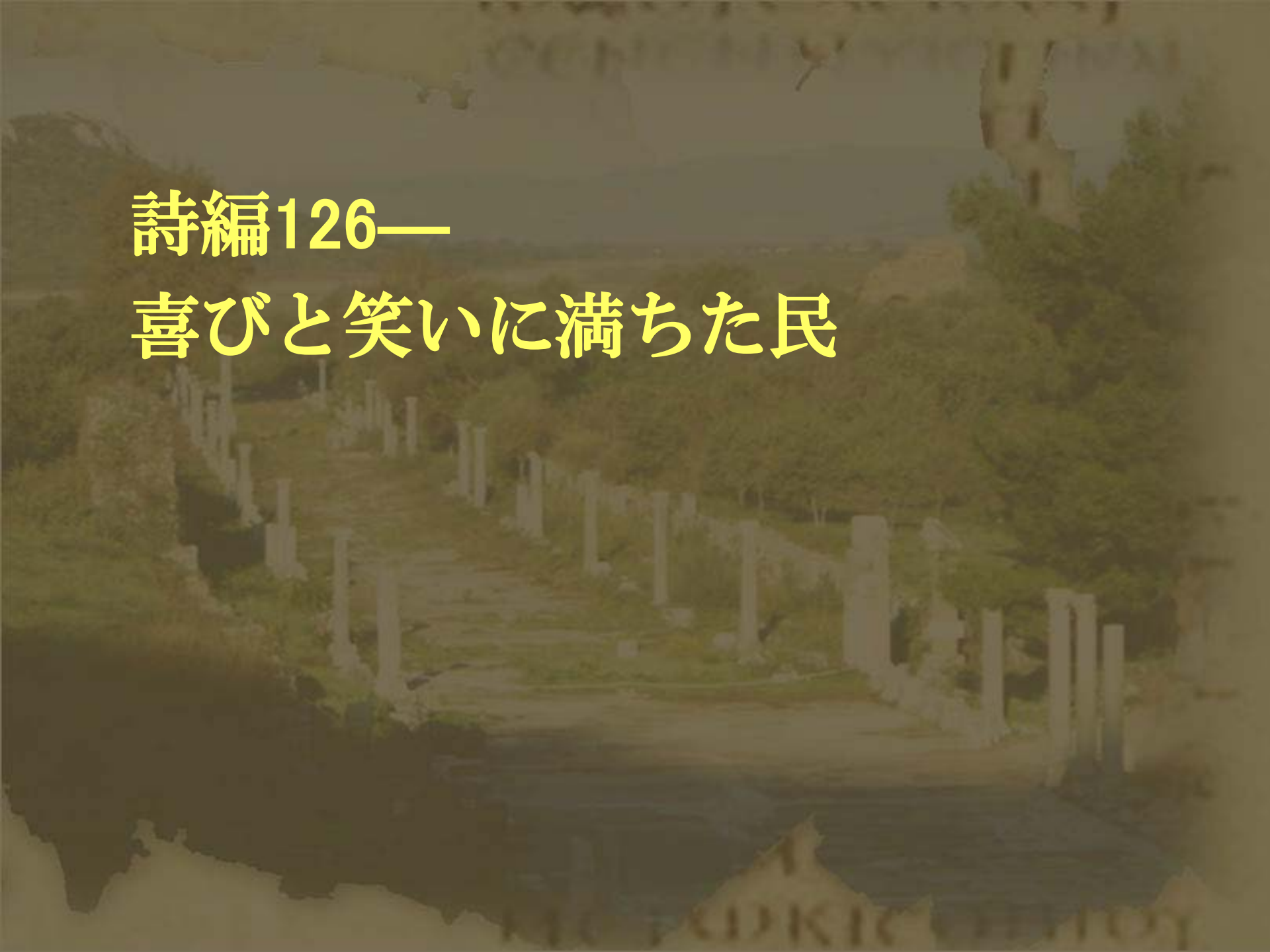
詩編125—

神は山々のように囲んでいてくださる

山々によって守られているエルサレムのように、神を恐れる人も同様に守られている。

巡礼者たちは神の導きを感じ、彼らの巡礼に忠実だった。

弟子として生きることは、心のまっすぐな人々に対する、神の目に見えない御手の導きを信頼することを意味する。



詩編126—

喜びと笑いに満ちた民

弟子として生きることとは、現在、
神がわたしたちをその過去から
贖ってくださったことを喜び楽し
むことを意味する。



詩編127—

働きと神に頼る正しいバランス

弟子として生きることは、正しいバランスを理解し、自分たちの役割をしっかりと果たし、かつ共に働いてくださる神により頼むことを意味する。

詩編128—

神の恵みを楽しむこと

巡礼者たちは、神の恵みを楽しみ、
喜びの中で巡礼に忠実だった。

弟子として生きることは、神の祝
福を思い起こすことを意味する。


詩編129—

打ち倒されるとき起き上がること

彼らは自分の背を耕されているように感じた。しかしながら、彼らは背を起こして、戦い続けることを決心した。そして最終的に、神は苦しめる者たちに恥じを受けさせられた。

巡礼者たちは不当な扱いをされ、苦しめられたが、彼らの巡礼に忠実だった。

弟子として生きることとは、状況が難しい時でも決してやめることがないことを意味する。




詩編130—

「待ち望むこと」の意味

時々、彼らができることは何もなかった。彼らは正しくあり続け、ベストを尽くしても、変化がないように見えた。

彼らは忍耐強く待ったが、彼らは赦しの神を信頼し、巡礼を続けた。

弟子として生きることとは、喜んで待ち望み続けることを意味する。



詩編131—
乳離れする時

弟子として生きることは、いつも自分の欲しいものを得られるのではなく、いつも自分に必要なものを得ることを意味する。




詩編132—

ひとつの一致した神の民として働く

神は信心のための一致を祝福する。


弟子として生きることは、神の民
と共に働くことを意味する。



詩編133—
一致に生きる味わい

彼らは容易な生活は持てなかったかもしれない。しかし、共同体と家族における彼らの一致は非常にすばらしかった。なので、彼らは忠実に巡礼の道を一緒に旅した。

弟子として生きることとは、共にあることを学び、完全な一致があるまで働きかけることを意味する。



詩編134—

旅の終わりの祝福

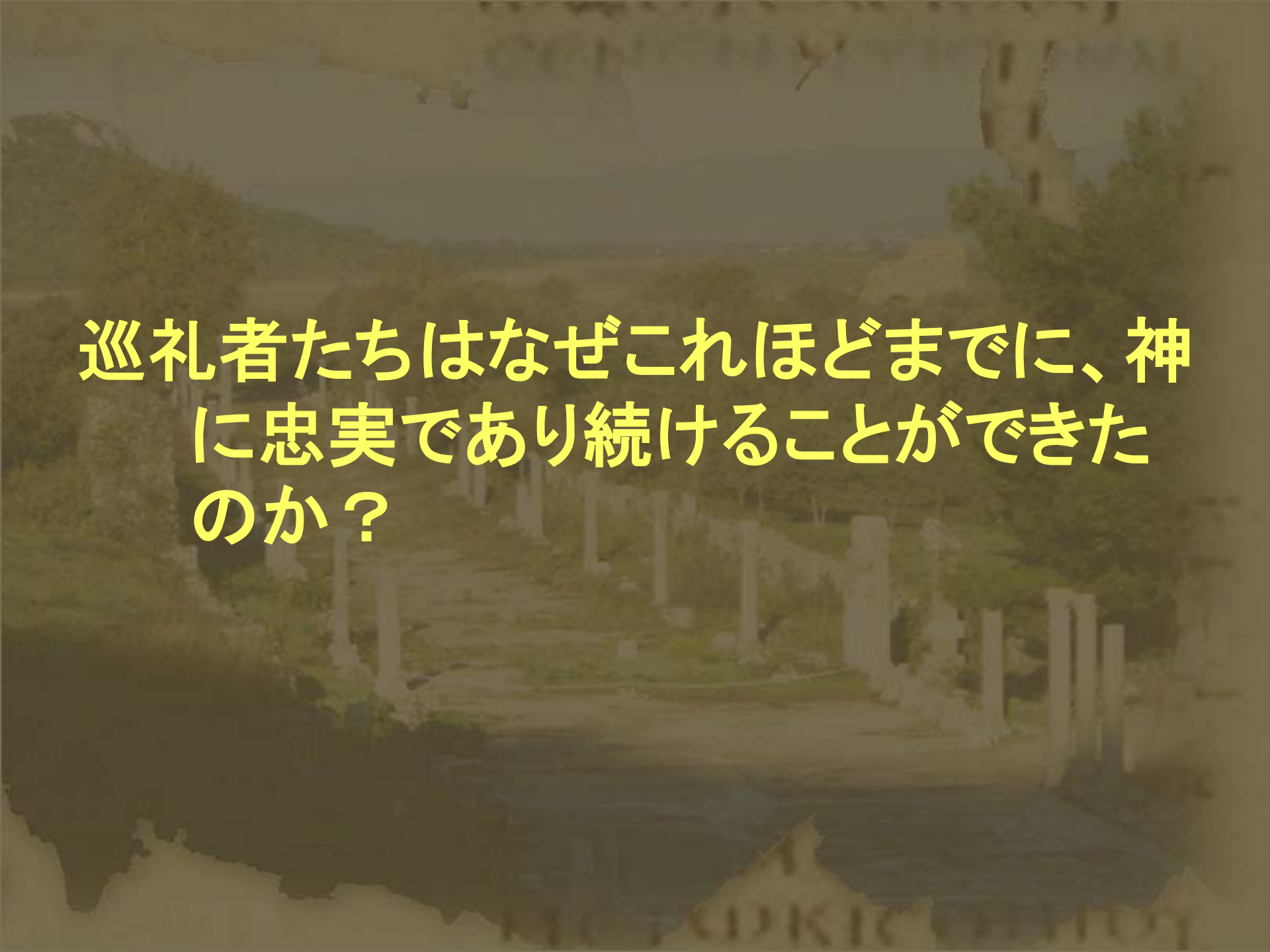
以下のようになることはどれほどの誘惑だった
ただろうか：

- ・ 何千もの他のユダヤ人たちがエルサレムに溢れていて、新しい仕事を交渉すること
- ・ 商業に従事して利益を得ること
- ・ 自分たちの宗教の「しなければならないリスト'to do list'」をやり通すこと
- ・ 長い旅の後の休憩をとること
- ・ 買い物および贈り物を得ること
- ・ 自分たちの犠牲を自慢すること
- ・ 無駄話すること
- ・ 残してきた家について心配すること
- ・ きつい人生について不平を言うこと

旅の終わりに、彼らは神を賛美し、栄光をもたらしたかった。どんな形の人生の状況があったにせよ、忠実な巡礼者たちはそこに来て、ひとつの神の民として共にお祝いした。

巡礼者たちは、いかなるときも神に対する畏れを保持した；彼らは巡礼に忠実だった。

弟子として生きることとは、何よりも栄光と賛美を神にもたらし生きて生きることを意味する。



巡礼者たちはなぜこれほどまでに、神に忠実であり続けることができたのか？

彼らが歩んだ道のりを想像してみてください。



Routes of the Pilgrims

多くの巡礼者たちにとって、その道のりは
簡単ではなかったはず。

なぜ彼らは、途中でそれを投げ出さずに、
最後まで忠実であり続けることができた
のか？

何が彼らを支え続けたのか？

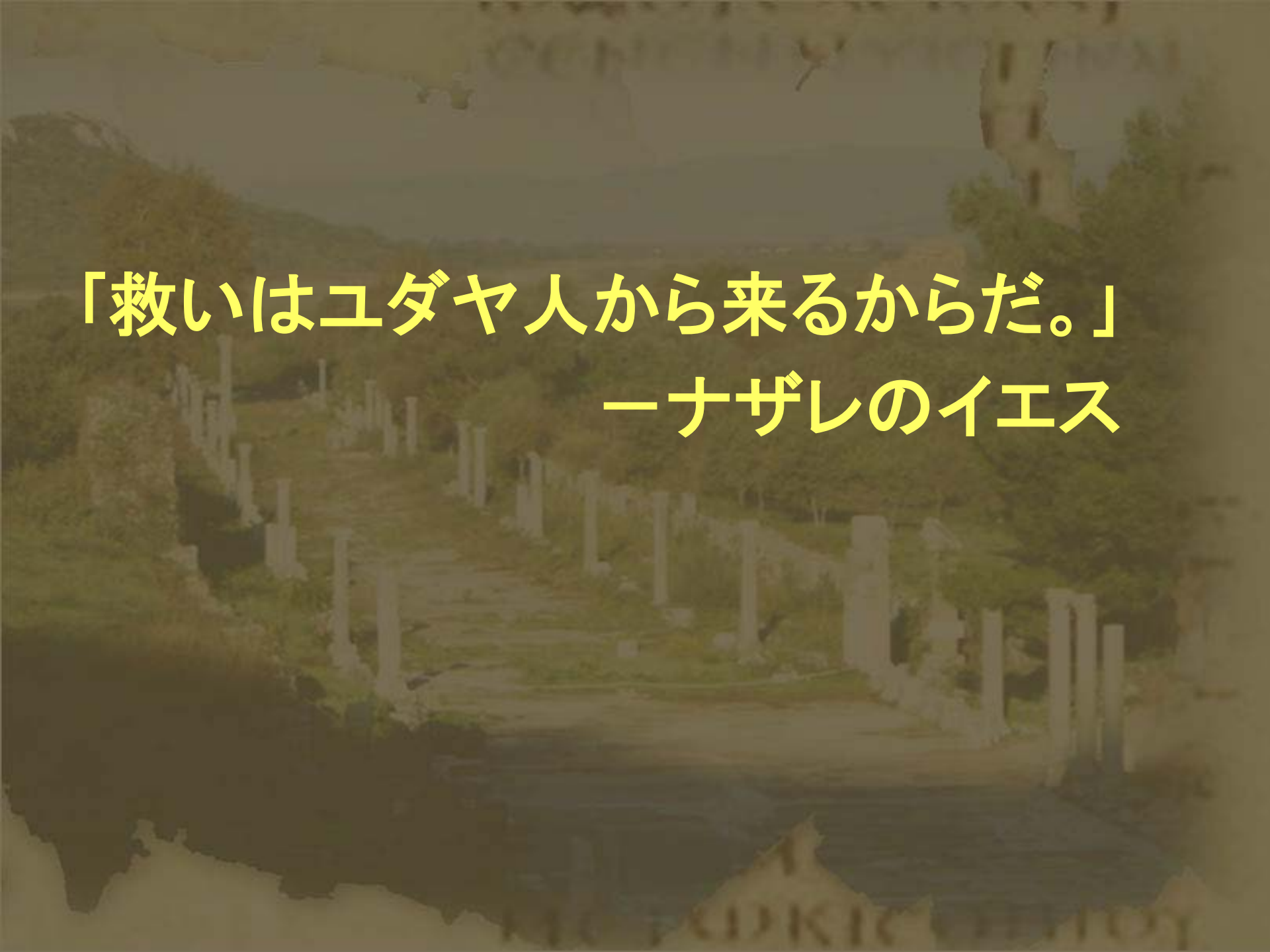
わたしたちは、イエス、十字架、聖書を知っ
ていても、時に弟子として生きることは
難しいと感じるのに...

「本物のユダヤ人は、決してエルサレムを忘れない。」
— 言い伝え

「わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です。」

「彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。」

— キリキア州タルソス出身のパウロ



「救いはユダヤ人から来るからだ。」
—ナザレのイエス



この誇りや忠実さはどこから来るものか？



The END